

2021年7月

2021年度の読書運動は「希望」がテーマとなりました。今回ご紹介する本も「希望」を感じていただけたらと思います。それは.....ホタルです。動物というより昆虫ではありますが、今回は同じ生き物としてご紹介したいと思います。希望の光を象徴するかのようにホタルの光は見とれるほど美しいものです。私が見たのは小学生の頃だったので、昔の話になりますが、暗闇で光輝くホタルの姿は、今でも鮮明に覚えています。一度見たら忘れられないと思います。皆さんは、ホタルを見たことがあるでしょうか？ホタルが棲む自然環境が失われつつあり、見たことがないという人もいると思います。ホタルが暮らしていける環境が増えることを希望して、『森の新聞4 ホタルの里』大場信義著 フレーベル館 1996をご紹介したいと思います。

日本の代表的なホタルとして、ゲンジボタルとヘイケボタルがいますが、ヒメボタル、クロマドボタル、オオマドボタル、イリオモテボタル、ヤエヤマボタル（日本一小さなホタル）やオオシママドボタル（日本一大きなホタル）、クメジマボタル（天然記念物）、翅のないホタルや光らないホタルなどが、説明されています。

東南アジアの熱帯雨林やマングローブには、ホタルの大群が暮らす「ホタルの木」と呼ばれる木があるそうで、まるでクリスマスツリーのように光り続けるそうです。実際に見てみたいなあ興味をそそられます。

ホタルが棲める条件が紹介されているのですが、最近では、この条件を満たす環境が減少しています。特に顕著なのが、水田です。農家が少なくなり、水田も減っています。その為、川や水田を、開発や整備などで工事をする際には、ホタルの棲む環境やそこに棲む他の生き物のことを配慮しながら行うことが重要になってきます。著者が提案するように、ホタルが棲む水田の土を、草などつけたまま表面から厚さ30cmの土ごと移動させてホタルの棲み家を残すことは、非常に大切なことだと感じました。

約25年前に出版されたこの本に掲載されている名古屋城の外堀に棲むヒメボタルですが、現在でも外堀でヒメボタルを見ることができるみたいですね。保護・保全活動されている方々の地道な努力に感謝し、自分には何ができるだろうかと一人でも多くの方が考えてくださると幸いです。